

6章 口頭英作文の進め

1.指導の背景

(1)口頭英作文とは

本書での定義

「口頭英作文とは、学習者が自分で作成した英文を口頭で発表する活動のことで、筆記英作文と同様に、教師が学習者の発話に一定の制約を加える形態と学習者が自由に発話できる両方の形態を含む。」

(2)口頭英作文の意義

口頭英作文の意義を学習者側と指導者側の双方から二点に分ける。

学習者側

ア)発話のスピードと即興性を高め、量を増やすことができる

- ・スピードと即興性が要求される。

筆記英作文のように時間の猶予が無いためミスは多くなるが、その点は教師が即座にフィードバックを与え補うことにより、生徒を最終的に正解へと繋げることができる。

- ・発話までの時間が短縮するため結果として筆記英作文よりも単位時間当たりの発話量を増やすことができる。

イ)スピーキングに発展させることができる

- ・アウトプットとして口頭で話す練習を繰り返すことでスピーキング能力を身につけることができる。

指導者側

ウ)音声を重視した指導を行うことができる

- ・学習者が語や句単位ではなく文単位で発話するため、センテンス・ストレス、リズム、イントネーションなどの「かぶせ音素」(suprasegmental phonemes)の指導を行うことができる。
- ・学習者の頭の中にある意味の存在を、文字を介することなく発話するため、文字を調音化するだけの音読よりもスピーキングに近い状況下で英語の韻律(prosody)を指導することができる。
- ・クラスメートの発表を聴いている生徒にとってはリスニングの練習にもなる。
- ・学習者に英語学習における音声の重要性を再認識させる契機となる。

エ)授業を活性化することができる

- ・ 口頭英作文では筆記英作文よりもテンポよく生徒を指名させることができ、生徒たちに指名されるという適度の緊張感が生まれ、結果的に授業に集中させることができる。
- ・ 生徒に声を出させることによって教師の一方的な授業になるのを防ぎ、授業を活性化することができる。

(3)授業で行う口頭英作文の種類

p. 88 を参照

2.指導の実際

(1)意識的なパターン・プラクティスを利用した口頭英作文

従来のパターン・プラクティス：基本文の置換、転換、拡張の際に教師が生徒に非文を発話させないように十分な注意を払い、キューを出していた。

→文の意味に注意を払わなくても正しい英文を得られる。

⇒文法と意味の両方を意識しながら発話させる必要がある。

(2)日本語をキューにした口頭英作文

和文英訳を用いる（例文→練習問題→ストーリーなどのように難易度を徐々に上げていく）。

pp. 91-92 を参照

私は今回授業で行った p. 91 の口頭英作文の例について指導者側が考慮しなければいけない点があると思う。それは初めて学習する文法・その活動の中で必要になるのは口頭英作文を生徒に行わせる前に指導しておくということである。p. 91 の例の場合は「踊っている少女」と「向こうで踊っている少女」では修飾の仕方が異なる。このことを事前に指導しておかなければ多くの生徒が「向こうで踊っている」を”girl”の前に置いてしまうという間違いをしてしまうのではないか。「踊っている少女」と「向こうで踊っている少女」では修飾の仕方が異なるということをきちんと指導すればこのような間違いを無くせるだろう。

間違えてから指導するという方法も考えられるが、それはごく少数生徒が間違えるような「間違えることを想定しにくい文法」の際に行われるべきであろう。「多くの人が間違えると想定された文法」を間違えてから教えるのは効率が悪いのではないか。「多くの生徒が間違えると想定された文法」はあらかじめ指導しておき、何人もの生徒が同じ間違いをしてしまうということは避けるべきだと考える。

